
せっかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せつかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

【Nコード】

N7068Y

【作者名】

主

【あらすじ】

Fate/ZEROの雁夜おじさんがあまりに気の毒！虚淵さん、アンタって人はー！
そんなことを考えつつ眠りについた男は、気がついたら第四次聖杯戦争のバーサーカーになっていた！

「ああ、きつとこれは夢だな。夢なら好き勝手にしてやろう。雁夜おじさんが幸せになるエンディングへと導くのだ！！」

原作知識を生かしつつ、雁夜おじさんのために奮闘する拳動不審な
バーサーカー。これは彼の夢の物語。

0・0 シリアスブレイカーに、俺はなる！（前書き）

小説家になろうに挑戦してみたかった。後悔はしていない。

アイディア勝負なので文章力やストーリーには期待しないほうがいいかもしれない。もちろんシリアスでもなんでもない。

0 - 0 シリアスブレイカーに、俺はなる！

±雁夜おじさんサイド±

その夜、間桐家の地下にある蟲蔵にて、間桐雁夜はバーサーカーを召喚した。

生まれつきの素養はあっても魔術の研鑽をほとんどまったく積んでいない雁夜はその肉体に寄生させたおぞましい蟲たちによって魔術師の体裁をとってはいるが、それでも他のマスターに比べれば足元にも及ばない。従って、サーヴァントは狂化によってパラメータのランクアップを行わざるを得なくなり、必然的にバーサーカーを選ぶこととなった。雁夜の文字通り寿命を削った召喚魔術の呼びかけに応え、吐血に塗れた魔方陣から闇の炎を巻きあげて漆黒のフルプレートを着した大男が姿を表す。その刺さるような禍々しい気迫はまさに狂戦士バーサーカーのものだった。

「や、やった……！成功した……！」

息絶える寸前まで生命力を失った雁夜が、地べたに頬を擦りつけながら亀裂のような笑みを刻む。その様子を後ろから満足そうに眺めるのは、間桐家の初代にして歪みきった人格を持つ老人、間桐臓硯だ。

そう、そこまでは彼らの計画通りであった。

計画から外れたのは、バーサーカーが突如としてその双腕を大上段に振りかぶり、一撃を持って臓硯を亡き者にしたところからであった。

「バーサーカー、何を　　！？」

「うぎゃあああああ！！」

いかに数百年の時を生きた真性の化け物でも、人間より遙か高みに達した英霊の一撃を堪えることは出来なかった。苦痛と汚辱に塗れた雁夜の姿に愉悦を覚えていた臓硯は、不意を衝いて放たれた恐るべき大破壊力に一瞬とて持ちこたえることなく、醜い悲鳴を上げながら血肉と臓物に為り果てた。音速を軽々と突破した拳は辛うじて消滅を免れた蟲すら散り散りに粉碎し、もはやそれらが臓硯だったことすら判別することはできない。

バーサーカーによる暴走は臓硯を殺すのみにとどまったが、それがもたらした惨状は地下室の崩壊に繋がるほどのものだった。余波を受けて大きく傾いた柱は天井を支えられなくなり、ゴゴゴと重苦しい音を立てながら次々と大きな亀裂を浮かばせる。

「桜が……！！」

ガラガラと崩れ行く地下室の床に爪を立て、雁夜が必死に蠢く。なぜバーサーカーが突然臓硯を殺したのかなど、どうでもいいことだった。もはや臓硯が死んだ今、聖杯戦争のような狂ったゲームに参加する意味はなくなつた。しかし、この蟲蔵には桜がいる。救い出してやると誓つた愛する女性の娘が今も蟲どもに囚われ、犯され、精神を食いつくされようとしている。例え自分が死んだとしても、せめて彼女だけは助けてやらなければならない。

（くそっ、動け！今だけは動いてくれ！頼む……！！）

必死に齒噛みして前に前に這い進もうとしているのに、召喚によって現界以上に体力も魔力も使い果たした雁夜の肉体は主の言うことを聞かない。ピクピクと痙攣するだけの己の四肢を明滅する視界に入れて、雁夜の視界が涙で歪む。自分のあまりに惨めな最期と、救われることのなかった少女への悔恨を悲観しての血涙だった。

「こんな、こんな結末なんて

うぐっ!？」

ついに諦め、力尽きようとした雁夜の首根っこを何者かがひよいと掴み上げた。その怪力の持ち主は雁夜を軽々と肩に担ぎ、大股で壁に向かって歩き出す。堅牢で冷たい鎧の感触を腹に感じる。

「ば、バーサーカー!？」

それはつい先ほど雁夜が召喚したサーヴァント、バーサーカーであった。彼は何を思ったのか、進行方向にあった見るからに厚い地下の壁を無造作に蹴破る。豆腐のように易々と破壊された壁の穴からわらわらと醜悪な姿形をした蟲がこぼれ落ちてくる。見ているだけで胸糞が悪くなる蟲の滝にバーサーカーがズボリと手を突っ込み何かを探すように上下左右に行ったり来たりする。呆然とバーサーカーの奇行を見る雁夜の目に、藍色の何かが映った。蟲の海の中に沈んでいるソレは、自分が救おうとした幼い命。

「バーサーカー、そこだ!そこにいる!」

バーサーカーが捜しているモノと自分が指さす者が同じである保証はなかったが、霞みゆく雁夜の思考ではそこまで至ることは出来なかった。だが幸運にも、その二つは見事に一致していた。

バーサーカーは雁夜が指さした箇所の手をやると、蟲の中から小柄な裸の少女をそつと掬い上げる。それは、間桐の魔術に無理やり染め変えられたせいで髪色も瞳の色も変わってしまった間桐桜だった。苛烈で非情な魔術処置によって精神は崩壊寸前だが、生きようと必死に息をする瞳は未だ生者らしさを垣間見せている。

(ああ、よかった)

その小さな裸体は蟲によって傷だらけになってはいるが、死に至るほどのものは見つけられない。治療を施せば桜は生きられる。臍硯

が死んだ今、自由に、普通の少女としての人生を歩むことも出来る。

「ば、バーサーカー。頼む、桜を、どうか、生かして、くれ」

もう目も見えない。崩壊する地下の振動も轟音も届かない。事切れる寸前の雁夜は、しかし最期の力を振り絞って己のサーヴァントに懇願する。ついに意識が途切れる最中、

「おk」

という意味不明な返答が聞こえた気がした……。

キバーサーカーサイドキ

Fate/ZEROで一番可哀想なのは雁夜おじさんだと思う。10人中10人はそう思ってるに違いない。

俺はたった今読み終わった小説を本棚に仕舞いつつ、その本の登場人物の一人、間桐雁夜に思いを馳せていた。彼ほどまでに必死の思いで聖杯戦争に参加して、血反吐を吐いて戦い尽くし、望まぬ最期を遂げた男はいないだろう。虚淵さんマジ鬼畜。

「んお、もうこんな時間か」

夢中になって読んでいたせいでもう深夜0時を回っている。明日も朝一で講義がある。なんちゃって大学生ではあるが、単位もやばいしちゃんと講義には参加しなくては。早々に電気を消してベッドに潜り込む。もう少し読了後の何とも言えない余韻に浸っていたかっ

だが、やむを得ない。

「夢の中でいいから、雁夜おじさんが幸せになるストーリーが見てみたいぜ……」

そう呟くと、のび太くんばりに即睡眠の才能を持つ俺が深い眠りに落ちていった。遠くなっていく聴覚に、「言い出しつぺの法則というものがあってだな？」という冷徹な男の声が届いた気がした。

目が、醒める。

気づけば俺はなぜか床に突っ立っていた。視界が狭い。まるで鎧の目庇でも覗いてるかのようだ。あ、いや違う。ホントになんか鎧着てるぞ。しかも全身に。不思議と重くない、っていうかめっちゃ身体に馴染んでる気がする。

視線だけで辺りを見渡せば、なんだかとても身体に良くない空気が充満した密室の中心にいることはわかった。なーんかつい最近似たような部屋の描写を読んだことがあるような？

「や、やった……！成功した……！」

声の源は俺の足元から発せられた。音の発生源を正確に察知できた自分に驚きつつ下に目を向けると、そこにはぐったりと床に倒れ伏しながらも達成感に笑みを浮かべる男がいた。全身余すところなく血だらけで、その様子は死人そのもの。顔面も半分はゾンビみたいに枯れている。何を隠そう、間桐雁夜その人であった。そして彼が俺を見上げながら「成功した」と言っていることから察するに、俺はどうやらバーサーカーになってるらしい。全身に着込んだ鎧と身体中に滾る力　魔力？　がその証左だ。夢で雁夜おじさ

んが幸せになればいいとは思ったが、自分でその手助けをする夢を見る羽目になるとは思わなんだ。

(待てよ、ここに雁夜おじさんがいるってことは、)

雁夜おじさんの背後を見れば、暗闇に溶けこむようにしてキモい爺さんがニンマリとしたキモイ顔をしてキモい腐臭をまき散らしていた。出たな諸悪の根源め。言峰綺礼はたしかに悪として歪んではないがどこか愛着が持てる。特に嫌いではない。ギルガメッシュもゲートオブバビロンとかかつこいいいし、厨二心をくすぐられるので純粹悪には思えない。だが間桐臓硯、テメーは駄目だ。てめーは俺を怒らせた！

(油断している今こそ好機！雁夜おじさんのトゥルーエンドのためにも死ねやオラァ！！)

夢なら夢で、俺は自分がやりたいようにするだけだ。つまり、雁夜おじさんの願いを叶えてやるのだ！

背中から魔力を噴出し、一挙動で臓硯の眼前まで接近。握り合わせた拳を振り上げ、バーサーカーのスキルである筋力強化を最大限に生かして思い切り叩き落す。ぎゅおん、と空気をねじり切る爆音の尾を引き、拳は隕石のように臓硯の脳天にクリーンヒットした。

「うぎゃあああああ！！」

芋虫のような蟲どもが飛び散るが、それらも全て粉碎する。一片だつて残してはやらん。絶対に許さんぞ虫けらども！じわじわとなぶり殺しどころか一瞬で消滅させてやる！

俺の気合の一撃によって臓硯は跡形もなく死んだ。夢のくせにリアリティがあるじゃねえか。ちょっと吐きそうだ。うえっ！

(ふう、これで一件落ちちゃ……おお？しまったやりすぎたか)

すこーし加減を間違えたらしく、先の一撃で地下室が崩壊寸前だ。こりゃいかん。さつさと雁夜おじさんと同じく地下室に閉じ込められているだろう桜ちゃんを救出せねば。

とりあえず雁夜おじさんが落ちてくる瓦礫の下敷きにならないように回収しておく。耳元で「バーサーカー!？」と困惑の音が聴こえるが、気にしない。というか、どうも上手く喋れないようだ。さつきからあーとかうーとかいった小さな呻き声しか出せない。どうやらバーサーカーになってるせいで俺の思考が狂ったりしないまでも言葉を発することはできないらしい。夢のくせにリアルだな。まあ無くても大丈夫だろう。最悪、筆記で意思疎通も出来る。

(桜ちゃんはこの辺かな？お、なんか当たりっぽいな)

適当に目の前の壁をぶっ壊してみると、ビチビチと震える蟲が滝のように流れだしてきた。この中にいそうな感じだ。早く救出してあげないと気の毒だ。

「バーサーカー、そこだ！そこにいる!」

視界の隅で雁夜おじさんが一点を指さす。さすがおじさんだぜ。

おじさんの差した場所をクレーンゲームみたいにそっと掬うと、何かを掴んだ感触がした。ひどく冷たいが、人間の子ともっぽい。案の定、それは桜ちゃんだった。レイプ目になってボーツとしているが懸命に肩を上下させて息をしている。無事のようにだ。ホッと安堵していると、雁夜おじさんがぶつぶつと何か囁きだした。

「ば、バーサーカー。頼む、桜を、どうか、生かして、くれ」

言われなくともそのつもりだ。こんな陰気臭い地下室とはスタコラサツサだぜい！バーサーカーはクールに去るぜ！！

「おk」

おっ？ちよつとした発言なら何とか出来るのか。これは嬉しい発見だ。意思疎通がしやすくなるぜ！臓硯も死んだし、桜ちゃんも助けた。後は間桐家当主の間桐 鶴野が問題だが、こいつはワカメの父親だけあつてヘタレだ。どうとでもなるだろう。臓硯が死んだと知ったら嬉々として泣いて喜ぶかもしれん。そうなれば雁夜おじさんとも仲直りで、桜ちゃんも普通の暮らしができるようになるかも。

気絶した二人を担ぎながら、俺は今後の二人の明るい未来について考えを膨らませ始めていた。

あれ？桜ちゃん助かったんなら俺もう必要なくね？

±雁夜おじさんサイド±

「う、ぐ、」

顔に当たった日光に急かされて泥のような眠りから覚醒すると、そこは自分の寝室だった。日光を浴びたのは久しぶりだった。臓硯が死んだせいなのか、体内の蟲は今までの暴れっぷりなど嘘のように静まっており、悪くて痺れる程度に収まっている。その痺れが脳を刺激し、昨夜何が起こったのかを想起させる。日光を遮るように手

をかざせば、その手の甲に令呪が宿っているのに気付く。まだ、バーサーカーとは繋がったままだ。サーヴァントは魔力を常に消費する。口惜しいことだが未熟な俺では蟲の助けがないとそれは不可能のハズ。

「いったい、何がどうなって……?」

「雁夜おじさん、大丈夫?」

「ッ! 桜ちゃん!?!」

耳元で発せられた少女の声に飛び起きる。そこには、椅子に座ってこちらを心配そうに見下ろす桜の姿があった。その瞳にも肌にも元の少女然とした健康的な張りがあり、蟲に蹂躪されていた過去を感じさせないほど快復している。その様子に、雁屋は今までの地獄のような日々全てが報われた気がした。否、事実報われたのだ。雁屋の当初の目的　　桜を救い出すことは、ここに果たされたのだ。

(もうこの娘は絶対に不幸な目に合わせない!)

内心に決意し、桜を抱きしめようと身を乗り出し、

コンコン

「あつ、ご飯が出来たみたい。ちょっと待っててね、雁屋おじさん」

腕の間をすりりと抜けて桜がノックされた扉へ小走りで駆け寄る。それを少し残念に思いながら、年頃の少女のような仕草を見せてくれる桜の姿に雁夜は優しげなほほ笑みを浮かべた。

(聖杯戦争などクソ食らえだ。令呪もさっさと教会で処理してもら

おう。遠坂時臣に桜ちゃんを間桐に譲ったことを後悔させてやりたいという願いはあるが、それは聖杯を通さなくても出来る。どのみち、すぐに暴走するような強大なバーサーカーを制御できる自信はこれっぽっちもない。きつと戦いの途中で惨めに力尽きてしまうだろう。それより、なるべく桜ちゃんの近くにおいて彼女を護ってやりたい)

「ご飯作りご苦労様。今開けるから待っててね、バーサーカー」

「は？」

呆けた声をあげた雁夜の眼前で、桜がよいしょとドアノブを捻る。ギィ、と古風な音を立てて開いた扉の向こうから、漆黒の気配がズルリと侵食してくる。雁夜がゴクリと息を呑む中、その気配の持ち主が全体を表す。

全身を黒いフルプレートアーマーで覆った優に190を超える長駆の男 雁夜が昨夜召喚し、目にも留まらぬ速度である臓硯をこの世から消し去ったサーヴァント、バーサーカー。

その威容と迫力は何者が見ても怯えすくむほどのものだったが、雁夜は別の意味で身体を強張らせて硬直していた。

当然だ。なぜなら眼前のバーサーカーは エプロンを着ておかゆの載ったお盆を持っているのだから。

理解を越えた光景に、雁夜はただあんぐりと口を開けて固まるしかなかった。

「雁夜おじさん、おかゆ冷めちゃうよ？せっかくバーサーカーが作
ってくれたのに」

「グルルルル（肯定）」

「なにそれこわい」

0・0 シリアスブレイカーに、俺はなる！（後書き）

小説家になろうでも何か書いてみたかったです。思いつきの作品
だけど、けっこうスラストラとアイディアが浮かんでるので続けて
みようと思います。Fate/Zeroの小説は持つてはいますが
読んだのは2年前です。アニメを見ながら思い出しつつ、ボンヤリ
としたところは小説をまた読み直しながらちよこちよこ書いてい
きます。

1 - 1 未来の巨乳キャラを守るんだ！（前書き）

一発ネタを連載作にすることの大変さを書きながら思い知る。

1 - 1 未来の巨乳キャラを守るんだ！

±雁夜おじさんサイド±

レンゲで掬ったおかゆをこちらに向けて「あーんして」とばかりに迫るバーサーカーからもぎ取ったおかゆをひたすら口にかっ込む。塩加減が絶妙でなかなか美味しいのが腹が立つ。米の旨みを存分に引き出す質素かつ贅沢な味わいは日本人の味覚にクリーンヒットする。見た目は西洋騎士のはずなのにおかゆを作れるというのは理解に苦しむ。聖杯からの情報にはそんなことも含まれているのだろうか？とりあえず精力をつけなければと頬を膨らませてもしかやもじゃと朝食を咀嚼する雁夜の前では、桜がバーサーカーに肩車されてキャツキヤと喜んでいた。未だ全快には程遠いが、笑顔を見せるだけの余裕が生まれたのは良いことだ。バーサーカーの方も乗り気のように暴れ馬のように装いながらもまるでお姫様を扱うように丁寧に相手をしている。「ぐるる」とか「うごご」とかしか声らしい声を発しないが、どうやら子ども相手の相手を出来るくらいの理性は残っているらしい。

(こいつ、本当にバーサーカーなのか？)

少なくとも雁夜にはそうは見えなかった。肌を突き刺すプレッシャーも狂戦士そのものだが、言動はその正反対だ。面倒見のいい近所のお兄さんと言えばちょうどいいだろうか。召喚した直後に暴走した際はマスターの制御すら受け付けない凶悪なサーヴァントを引いてしまったのかと不安になったが、もしかしたら臍硯をマスターである俺の敵と瞬時に理解して排除したのかもしれない。マスターに負担をかけないために魔力消費を最小限にセーブしているらしいバ

「サーカーの背中を眺め、雁夜は空になったお椀を枕元に置いた。バーサーカーのセーブと食欲が満たされたおかげで、死人のような干からびた肌に若干の張りが戻る。

（理性のあるバーサーカー、か。狂化でパラメーターが向上しつつも思考能力がほとんど低下していないなんて、どういう理屈なんだ？）

冷静に考えれば、これは反則とも言える事例だ。バーサーカークラスの有利な特性だけつまみ食いしてデメリットはほとんど無視なんて他のマスターが聞けば怒り狂うだろう。サーヴァントシステムを開発した臓硯ならば何かしらの検討がついたかもしれないが、今となってはそれも叶わない。叶えたいとも思わない。雁夜にとっては己のサーヴァントが意外に従順そうだとわかっただけで十分だった。

（バーサーカーの制御に問題はなさそうだ。残る問題は、兄さん

現・間桐家当主、間桐鶴夜の存在か）

奴は臓硯の傀儡のような男だ。臓硯の指示通りに動き、立ち向かうどころか意見することも出来ない操り人形。臓硯亡き今も、その意思を継いで桜を時代の間桐家のための贄にしようと画策するかも知れない。急造の魔術師である俺と違って鶴夜は長年修練を積んだ生粋の魔術師だ。正面きって戦っても勝ち目はない。だが今の俺には強力なコマがある。

（一応、説得はしてみよう。奴も臓硯の被害者ではある。だが聞き入れなければ、最悪、バーサーカーを使って奴を……）

「ぐるるっ」

「ん？な、なんだバーサーカー？……この手紙を読めっていうのか？」

実の兄の殺害も視野に入れだした俺の肩をぽんと叩いたバーサーカーが一通の手紙を手渡してきた。その手は心配するなと言うように親指がぐつと立てられている。この英霊の馴れ馴れしさというか見た目とのギャップというか英霊らしかぬ日常じみた所作には、雁夜はもう驚かなくなった。

手紙の差出人は鶴夜だった。

『なんかスゲー怖いお前のサーヴァントがめっちゃ睨んでくるし、ジジイもくたばったらしいし、もう俺もゴールしていいよね？というわけで俺は生まれて初めての自由を満喫しに自分探しの旅に出るので絶対に探さないで下さい。絶対だぞ？絶対だからな？』

P・S 桜をよろしく^^』

「あんのクソ兄貴！」

ふざけた手紙をグシャグシャに丸めて部屋角のゴミ箱にシュウウ

ツツ！！超！エキサイティン！！

まだ満足に動かせない腕のせいで目標を逸れて床に落ちた手紙をゴミ箱に入れ直すバーサーカーを尻目に、盛大な肩透かしを食らった雁夜はがっくりと頭を抱える。

色々と言いたいこともあったが、すでにいない人間に言っても仕方がない。元より、先に間桐家から逃げ出したのは雁夜の方なのだから、鶴夜を強く責める資格が自分にもないことも重々承知していた。大きいため息を付いて思考を切り替えると、「さて、これからどうするか」と雁夜は独りごちた。桜の救出という目的は果たしたし、目下の障害と思った兄もとんずらこいた。遠坂時臣に桜にした仕打ちを思い知らせてやるうと心中で渦巻いていた執念も、無事な桜を

見ていると小さくなってゆく。残す問題は 自らのサーヴァントと聖杯戦争だ。正直に言って、今の自分に聖杯に叶えてもらうような大それた願いなどない。そうになると、バーサーカーはお荷物以外の何者でもない。魔力を食いつぶす上に敵襲の危険も誘う厄介者だ。

はしゃぎ過ぎて疲れたのか足取りのおぼつかなくなった桜を優しく支えるバーサーカーにちらりと流し目を送る。雁夜が眠っている間に桜は自分の命の恩人であるバーサーカーにすっかり懐いてしまっていた。

(悪い奴ではなさそうだし、心苦しくはあるが、自害でもさせて消えてもらった方が)

「ううっ…」

「ぐいぐいっ!？」

「っ!？桜ちゃん!？」

突然、その場に倒れ伏した桜とそれに慌てふためくバーサーカーに悪寒を感じて駆け寄る。

抱き上げれば、桜の顔色は蒼白になり、全身から玉のような汗が吹き出していた。唇が急激に乾き、肌から潤いが見る間に抜け落ちてゆく。まるで雁夜が今の状態になるまでを早送りで見ているかのようだ。

「こ、これは…!!」

思いつく理由は1つだけ 臓硯の蟲による強引な施術の影響だ。臓硯という頭脳を失った蟲どもが暴走し始めている。サーヴァント制御を目的として植えつけられた雁夜の蟲と違い、桜のそれは臓硯が理想とする次代の間桐を生む母体育成を目的としている。臓硯の

コントロールを離れた蟲どもは目的を見失い、桜の体内で暴れまわっているのだ。

「臓硯め……死んでもなお桜ちゃんを苦しめるのか！」

荒い息を吐く桜を自身のベッドに寝かせながら、雁夜は憤怒に燃えた。

バーサーカーがどんなに魔力消費をセーブしても、すでに蟲によってポロポロに食いつくされた雁夜の身体は一年も持たない。後悔はない。そうなることを承知した上で臓硯に取引を持ちかけたのだ。しかし、桜は違う。

(この娘には、真つ当な人生を歩ませてやりたい)

刻々と息を荒くする桜の頬を撫でる。ザラリとした粗い肌触りに臍を噛む。

間桐家の魔術を知る臓硯も当主もいない今、あるかどうかもわからない治療法を捜している猶予はない。あと数日の間に、蝕まれた桜を癒さなければならぬ。それほどの奇跡を起こせるものが必要だ。一度目を閉じて覚悟を決めると、雁夜は背後に向き直る。そこには従者然として雁夜の後ろに控え立つ騎士　　バーサーカーがいた。禍々しく燃える赤い瞳を力を込めて真つ直ぐに見つめる。

「バーサーカー、聖杯に願うことが出来た」

バーサーカーは黙して雁夜の口から命令が下されるのを待つ。まるで言わなくても雁夜の意味が通じているかのように。雁夜は爛々とキラつく赤い双眸の奥に同じヒトの心の温かさを感じた。

「桜を救う。そのために、俺はこの命を使い果す。協力してくれ、

「バーサーカー」

幼い少女のために命をかける。清らかで強い願いを掲げた雁夜の顔には、今までにない熱い信念と誇りが確かに芽生えていた。その願いに、黒鉄の騎士は片膝を突いて応える。左胸に叩きつけた右拳がガシャンと力強い音を立てる。主君への忠誠を示す返礼だった。

ここに、桜の命を救うために聖杯を目指す者たち
間桐雁夜 /
バーサーカー陣営が誕生した。

✪バーサーカーサイド✪

雁夜おじさんを助けるのが目的だったんだがなあ。今はどうにかこうにかして魔力消費を抑えてるからキツくないだろうけど、俺が本気で戦うことになったらおじさんの寿命ゴリゴリ削っちゃうんだぜ？血反吐吐いて地べたでジタバタ痙攣だぜ？……まあ、本人が望むのならいいか。凄くさっぱりした顔してるし。それにこのまま桜ちゃんが死んじゃったら雁夜おじさんの今までの決死の努力も水の泡だしな。俺としても、例え夢であったとしても小さな女の子が苦しんで死んでいくことを見過ごしたくない。この夢から覚めたら最悪に目覚めが悪いことになる。

しゃーない！ここは一つ、騎士つぱくカツコつけた返礼をして、おじさんと一緒に戦うことにしますか！

1 - 1 未来の巨乳キャラを守るんだ！（後書き）

次話はまだアイディア段階です。この駄文を読んでくれる殊勝な方がいましたら、どうか気長に待ってくださいあゝ

1 - 2 黒ファントムに侵入されました(前書き)

ひゃあ！感想だあ！

まさかこんなに大それた評価をされるとは思ってもみなかった。感動した！コメントでもあるように、このSSは半分はネタ、半分は勢いで出来ています。原作に忠実な設定なんてどこ吹く風だし、過度な期待は厳禁です！それでも大丈夫なイケメンさんだけ見て行ってね！ゆっくりして行ってね！

1 - 2 黒ファントムに侵入されました

キウエイバーサイド

深夜、極東日本の地方都市、冬木市の港湾区の一部を占める広大なコンテナターミナル。

魔術によって人払いがされたその地で、四体のサーヴァントが睨み合いの体制に入った。四体全てが世界に名の知れた遙か昔の英傑豪傑。総身が震え上がるほど殺気と緊張に支配された空間で、僕ことウェイバー・ベルベットはひたすら気絶だけはすまいと己を奮い立たせ、この戦争に参加していなければ決して目にするこのできない本物の英霊たちを網膜に刻みつけていく。

最初に戦っていた銀髪の女のサーヴァントセイバーと、憎つくき講師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトのサーヴァントランサー、そして突然その場にしゃしゃり出て何を思ったのか自分の軍門に降るように言い放ち、あるうことが「物は試し」で真名をばらしてくれやがった僕のハチャメチャサーヴァントライダー。そして、自らを差し置いて王を名乗るのが気に食わないとポールの上に現れた金ピカのサーヴァントアーチャー。この戦争の根幹を作った遠坂の当主が召喚した、圧倒的な存在感を撒き散らすライダー以上の暴君。

「我が拜謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

アーチャーに真名を尋ねたライダーにキレた沸点の異様に低いアーチャーが、昨夜に遠坂邸で見せた多数の宝具の射出という不可解な攻撃を再現しようとする。こちらに向けられた黄金の宝具の矛先に思わず「ひっ」と情けない悲鳴を上げてしまう。

こんな展開にしてくれやがったライダーに撤退をさせようと口を開きかけ、

「む？」

ライダーが唸った。跳ね上げられた眉の下の鋭い眼光がアーチャーから外される。見れば、四体のサーヴァント全員が同じ方向に目を向けていた。全員の視線が集中する中、黒い炎を巻きあげてまた新たなサーヴァントが姿を表す。

「な、なんだアイツ……」

それは漆黒のサーヴァントだった。全身を隙なく覆うフルプレートアーチャーは光すら吸収するほどに黒く、無骨な兜の目庇だけが紅蓮に燃えていた。全身から放たれる殺気と漲る魔力は間違いなくバーサーカーのものだ。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ。で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？あれは」

「ま、待てよ！あいつ、幻惑の呪いか加護を受けてるみたいでよく見えないんだよ！だけど……パラメーターはほとんどAだ。それくらいなら、見える」

「あんま参考にならん情報だなあ」

「うるさい！他の奴も似たようなもんだよ！……たぶん」

時折姿がボヤけて見えるが、英霊固有の幻惑スキルが狂化によって弱まっているのか、能力値くらいは僕にも判別できた。バーサーカークラスの恩恵を得たあの狂乱の英霊は、理性をなくす代わりにパ

ラメーター数値が向上されている。

この場にいる他のマスターとサーヴァントも同様のようで、ゆらゆらと陽炎のようにブレて見えるバーサーカーに軽く驚きこそすれ、中途半端になっっているらしい幻惑スキルはすでに看破してじっと闘入者の出方を見ている。

「どうやら、あれもまた厄介な敵みたいね……」

「それだけではない。四人を相手に睨み合いとなっては、もう迂闊には動けません。しかし、あの鎧、どこかで……」

セイバーとそのマスターが小声で何事か相談している。きっとこの厄介な状況を危惧しているに違いない。僕も早くライダーに掛けあってさっさと逃げ出そう。こいつらが一気に戦いをおっぱじめたら戦場のど真ん中にいる僕は即座に肉片になってしまふ。それだけは嫌だ！ライダーが断ったら令呪を使っても命令を聞かせてやる！

「ライダー、早く」

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが……」

え

底冷えがするような怒気を放つ声が響く。振り返れば、自分を凝視するバーサーカーをアーチャーが憤怒の眼差しで睨みつけていた。ライダーに向けていた宝剣と宝槍がバーサーカーに照準を変える。

「せめて散りざまに我を興じさせよ。雑種」

「んなっ!?!」

英霊の最高の切り札である宝具をいとも人目に簡単に晒し、あまつさえ捨てるように射出するデタラメな攻撃。二つの宝具がバーサーカーに直撃し、ドデカイ爆発を一度起こした。爆風がぶわんと身体を叩きつけて、視覚と聴覚を奪う。

あんなものを食らえばいかなサーヴァントであっても 待てよ、
“一度”？どうして爆発は一回だけなんだ？

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性をなくしているにしては、えらく芸達者な奴よのう」

「 　　んな、アホな 　　」

霞む視界で見れば、なんとバーサーカーが先ほど弾丸の如き速度で放たれた黄金の宝剣を握っていたのだ。他の英霊の宝具を、一瞬で掴みとり、己の四肢の延長のように操る。そんなもの、神業の域を超えている。狂化してなお身体に染み付いた武芸は、あのサーヴァントがいかに優れた英霊なのかをひしひしと伝えてくる。

「 　　その汚らわしい手で、我が宝物に触れるとは……そこまで死に急ぐか、狗ッ！」

「そんな、馬鹿な……」

白いこめかみに青筋を浮かべて怒り狂ったアーチャーの背後に、一斉に輝く宝具が出現した。その全てが掛け地なしの世界の至宝、最高級の宝具だ。

「その小癩な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか 　　さあ、見せてみよ！」

空気を震わせる怒声を合図に、宝具の群れがバーサーカーに向かっ

て放たれた。ズドン、バガン、と立ち並ぶ巨大なコンテナを次々と路面ごと抉り吹き飛ばし粉砕し、コンクリも鉄もアスファルトも全てを塵に変えてゆく。大音響と大閃光の連続炸裂に頭蓋の震えが止まらない。

そんな、アーチャーの有り得ない連続攻撃に晒されたバーサーカーもまた、ありえない防御を行った。襲い来る宝具をいとも簡単に切り払い、撃ち落とし、さらにはより強い宝具を選別して、即座に持ち変えて次の攻撃を払いのける。それらを全て一秒にも満たない刹那の間に何度もやってのけているのだ。当のバーサーカーの動作にも焦燥は一切感じられず、夢を見ているように流れるような練武でもってひよひよいと疾駆している。まるで身体に染み付いた反射神経を信頼し、身を任せているかのようだ。あんなサーヴァント、絶対に馬鹿げている。

「　　どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いやつとの相性は最悪だな。黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああ節操なく投げまくっていれば深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのう」

この戦いをふむふむと冷静に分析してくれやがるライダーの台詞に耳を傾けていると、唐突に爆音が止まった。アーチャーが宝具の全てを射出し終えたのだ。急激に静まる夜気の中、ひゅんと風切り音を立ててバーサーカーが何かを投擲し、アーチャーの足場のポールをバラバラにする。足場を寸断される前に驚異的な俊敏さで跳ねたアーチャーがガシャンと鎧を力ちならしてその場に着地する。

ブチブチ、という布の切れるような音が聞こえた気がした。再びバーサーカーに向けられたアーチャーの双眸は憤怒に見開かれていた。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ。その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つ残

さぬぞー！」

「「「「「「……！！」「」「」「」

その場にいる全員が息を呑む。アーチャーの背後の空間に、30を超える超常の宝具が出現したからだ。いつも偉そうにふんぞり返っているライダーすら目を見張るほどの有り得ない光景　大量の宝具の一斉解放の前触れに、僕の意識はスパークを起こして今にも落下しそうだ。

だが、

「……貴様ごときの諫言で、王たる私の怒りを鎮めると？大きく出たな、時臣……」

おそらくマスターが制止に入ったのだろう。アーチャーは宝具の解放を止めた。だがマスターの言葉を持ってしても怒り冷めらやぬアーチャーは、背後の宝具を消すときも忌々しそうにふんと鼻を鳴らして踵を返す。

「……命拾いをしたな、狂犬」

興味も失せた、というような傲岸不遜な横顔をバーサーカーに向けると、アーチャーが居並ぶ三体の英霊をじろりと流し目で睥睨する。

「雑種ども、次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

心底偉そうに言い放つと、アーチャーは音も立てずに霊体化してこの場を後にした。いなくなったことを確認した途端、ぜえと大きな息が漏れる。いつの間にか息をすることを忘れてしまっていた。息

をできるうちにしておこうとゼーはーと何度も深呼吸をする。これから何度呼吸が止まることになるかわかったもんじゃない。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質ではなかったようだな」

何を呑気そうにニヤニヤしながら顎を撫でてやがりますかコイツは。まだあのバーサーカーが残ってるんだよ！

「心配するな坊主。どうやら次の相手はもう決まっているようだぞ？」

「へっ？」

兜の目庇の中でキラキラと光る真つ赤な双眸が、すかさず次のターゲットに向けられる。まるで最初から狙っていたのはお前だとも言つかのよう、アーチャーから奪ったままの宝剣の切っ先をセイバーただ一人に向ける。いきなり鋭い視線を投げつけられたセイバーがぐつと表情を険しくして剣を構えなおした。

「……………Hi……………」

地の底から湧いたような戦慄の声で、バーサーカーが低く唸った。初めて耳にするバーサーカーの声音は、ぞつとするほど掠れたものだった。

何の予備動作も見せず、ズドンと後方に爆煙を巻き上げたバーサーカーが一瞬でセイバーに肉薄する。野獣じみた乱暴な動きから放たれた一撃は、しかし、芸術の如き冴えを見せてセイバーの防御の剣に振り下ろされる。

火花を上げてぶつかり合った宝剣を中点に、兜をビリビリと震わせる声量で狂戦士が叫び声を上げた。セイバーの鼓膜を破らんばかり

1 - 2 黒ファントムに侵入されました(後書き)

かっこいいバーサーカーだと思った？残念、カッコ悪いバーサーカー
ーちゃんでした！

1 - 3 健康は毎日の食事から(前書き)

なんでこんなに評価されてるの……。なにこれ怖い。でも嬉しい！
ヒヤッホウ！

やっぱり皆、雁夜おじさんは幸せになるべきだと思ってたんだね。
ようし、必ず幸せにしてみせるぞ！でもあんまりプレッシャーかけ
ないでね！メンタル弱くてごめんね！

1 - 3 健康は毎日の食事から

港湾区画にて戦闘が起こる半日前

±雁夜おじさんサイド±

「私を助けてくれた後ね、バーサーカーがずっと頭を撫でてくれたの。頑張ったねって」

「アイツ、そんなことしてたのか」

「まるでテレビに出てくる正義の味方みたいに、かつこ良かった」

「ははは、アイツが正義も味方か」

「バーサーカーはね、ヘルメット脱いだらきつとイケメンなの」

「え？あ、ああ。かもしれないね」

「私ね、大きくなったら、バーサーカーと……すー」

「……アイツとは一度きつちり話しておく必要があるな」

桜が寝息を立て始めたことを確認すると、雁夜は左手の令呪を見ながら静かに呟いた。

倒れてからずっと付かず離れず看病をしてきた成果なのか、桜の衰弱の進行は落ち着き、容態も安定してきた。しばらくは大丈夫そうだ。ほっと安堵の息をつき、バーサーカーが用意した冷たい水でタオルを搾り、額にそっと置く。「バーサーカー……」という小さな寝言に雁夜の口元がひくひくと痙攣する。いつの間にか雁夜は桜のことを娘のように考え始めていた。

(バーサーカー、ちょっと話があるんだが)

桜の件と今後の戦いのことを相談しようと、己のサーヴァントを念

話で呼び出す。しかし、

「……バーサーカー？どこに行つたんだ？」

反応は返つてこなかった。階下に降りて厨房を覗いてみるが、綺麗に拭き上げられたお椀とこれから料理をしようと用意された調理器具だけが佇んでいるのみだ。バーサーカーは使用済みの食器類を持つて降りたので、てっきり厨房で洗い物でもしているのかと思つていた雁夜は、己のサーヴァントの気配がすでに間桐邸にないことに今さらになつて気付いた。桜に付きつきりだつたせいで、バーサーカーの外出を察知出来なかつたのだ。途端、雁夜の背中を寒気が走る。

（まさかアイツ、一人で他のサーヴァントと戦つつもりか！
？）

言動では判断しにくいだが、鎧に刻まれた膨大な傷の武勲と全身から滲み出る強者の風格を見れば、あの英霊がかつて武の頂点まで上り詰めた戦士であることは容易に想像がつく。雁夜が傷一つ負わせることも叶わない臍硯をたつた一撃で殺したことがその証だ。他の英霊はまだ二体しか見ていないが、おそらく並大抵の英霊なら物の見事に切り伏せられるほどの実力を秘めているに違いない。にも関わらず雁夜が焦燥に狩られているのは、その二体の内の一体が原因に他ならない。

（遠坂時臣のサーヴァント　アレはやばい！危険過ぎる！）

使い魔を使って垣間見た黄金のサーヴァント。指先ひとつ使わず、造作もなく、それこそ羽虫を始末するようにアサシンを殺してみせたアーチャー。一目見て、格の違いを思い知らされた。いくらバー

サーカーが強くて、何の対策もなしに戦いを挑むのは無謀だ。もしも初っ端からアーチャーとぶつかってしまえば、勝ち目は薄い。刻印蟲に蝕まれた身体を引きずり、雁夜はバーサーカーを追走しようとうと玄関扉に走りより、

「ぐるる〜」

「おわっ!?ば、バーサーカー!無事だったか!」

ガチャ、と目の前で扉が開いた。たたらを踏んで見上げた先には、眩しい日光を背に漆黒の騎士が佇んでいた。雁夜にはその呻き声が「ただいま」と言ったように聞こえた。そのあっけらかんとした健在っぷりに、上下させていた肩をガクリと落として安堵する。

「お前、マスターに黙ってどこに行つてたんだ!?行動するならするで前もって教え　おい待てなんだそれは」

バーサーカーの両手にぶら下がったソレらを目にした雁夜の表情が固まる。それは、食料で一杯になった買い物袋であった。律儀にエコバッグを使用している。

「お、おまつ、これっ、なにしてっ!?!」

顔を激しく引き攣らせて汗を垂れ流す己のマスターに、バーサーカーは猫が獲物を魅せつけるように買い物袋を雁夜の目の高さまで掲げ上げる。「特売!」「採れたて新鮮!」「栄養満点!」というシールが貼られた食材がこれでもかと詰め込まれていた。ぐるる!と低く唸ったバーサーカーがえっへんと胸を張る。「これで美味しいもん作つてやるからな!」と言っているかのようだ。

「ば、ば、ば、ば、」

唇をわなわなと震わせ、雁夜は言葉にならない言葉で呻く。半端者の魔術師である雁夜も、魔術の秘匿は絶対の掟であることくらいは理解している。というか、そもそも戦争中にサーヴァントが呑気に買い物に行くこと事態がどうかしている。サーヴァントは霊体化していると現実の物質に触れられないので、買い物をするには実体化するしかない。ということとは、バーサーカーはこのままの姿で買い物をしてきたということになる。誰に見られているかわからないし、他のマスターやサーヴァントから狙われたら一大事だ。もちろん雁夜と桜のためを思つての行動ではあるだろうが、非常識過ぎるだろ常識的に考えて。

雁夜の頭の中で驚愕と困惑とやり場のない怒りがグルグルと輪になって駆けずり回り、

「バター!!」

バターになって雁夜 of 精神と共に溶けた。奇声を上げてバタリと気絶したマスターを見て、バーサーカーは「うご?」と小さく首を傾げた。まったく可愛くなかった。

✪アサシンサイド✪

『どうした、アサシン。報告しろ』

「は、はい。申し訳ありません。間桐邸には、異常は、ありません。ぐすつ」

『……そうか、わかった。これからも監視を怠るな。動きがあれば逐次報告しろ』

「心得ております、我が主」

涙ぐんだようなアサシンの湿り声に、念話の先にいる綺礼は一瞬だけ懐疑の色を声に滲ませたが、他愛ない聞き間違いと断じて切り捨てた。アサシンが泣くなど有り得ないのだ。……本来ならば。

雁夜の懸念は的中していた。言峰綺礼のサーヴァント、真名をハサン・サツバーハ。遠坂邸で脱落したように見せかけたアサシンの分身であり、間桐邸を監視する役目を負ったサーヴァントだ。バーサーカーの中の人はすっかり失念しているが、アサシンはその『気配遮断』のスキルを生かし、雁夜を含めた聖杯戦争の参戦者たちに日夜鋭い眼差しを向けていたのだ。

「うっ……ぐすっ……」

そんな彼が、泣いていた。髑髏の仮面の隙間という隙間からジョウウ口のようにダバダバと落涙し、ひっくひっくと背中を震えさせている。

「まさか、自分の英霊にお使いに行かせるようなマスターがいようとは……。いや、サーヴァントを使い捨てにする私たちのマスターも似たようなものか。バーサーカーの英霊よ、お前と私たちは似たような境遇にあるのだな……」

アサシンには、オツムの足りないバーサーカーがマスターにこき使われているようにしか見えなかった。およそ英霊に対する扱いとは思えないひどい待遇に晒されている同じサーヴァントの姿が、アーチャーの露払いのために使い捨てにされる自分たちと重なった。同じように冷遇されているサーヴァントの背中が間桐邸の玄関に消えて行くのを何もせず見送りながら、一度鼻をすすする。

「バーサーカー、今回のことは報告しない。どうせ報告しても我が

主に鼻で笑われるだけだろうしな。……お互い敵同士だけど、頑張るうな」

そう呟くと、アサシンはまた鼻をすすった。彼は暗殺者のくせに情に熱く、そして馬鹿だった。

キバーサーカーサイドキ

うーむ。この家の冷蔵庫にろくなもんがなかったから外に調達に行つたんだが、帰ってきたら雁夜おじさんが硬直してそのまま昏倒してしまった。桜ちゃんの看病で疲れていたんだろう。

持ち前の筋力で雁夜おじさんの腰をひよいと抱え、客間の大きなソファに横たえさせる。うーんうーんと顔を顰めて唸っている。悪い夢でも見ているのかも知れない。よほど心労が溜まっているんだろう。気の毒に。

風邪を引かないようにタオルケットをかけてあげると、俺は買ってきた食料と洗いたてのエプロンを持って台所へ歩を向ける。

幸いなことに今日は商店街上げての緊急特売日だった。何でも、とびつきり美人な西洋人二人が訪れたため、その美貌にマイってしまった商店の店主たちが舞い上がって大安売りを始めたらしい。十中八九、アイリスフィールとセイバーだろう。あの二人のおかげで、全身に鎧を着込んだ俺が買い物に来ても「あの美人さんたちといい鎧の大男といい、今日は街でなんかイベントでもあるのかね？」と笑われる程度で済んだ。今は聖杯を狙うライバルだが、その点は素直に感謝しよう。

戸棚から鍋を取り出し、水を入れて火にかける。その間に材料を切つて下ごしらえをおく。一人暮らしが長かったので料理の腕にはそ

こそこ自信があるし、ユーキャンで調理師免許を取ったので献立のレパートリーも広い。資格マニアでよかったぜ。

「~~~~~」

あらゆる野菜がまな板の上で瞬時に切り刻まれていく。包丁がまな板を叩くスカカカという音が射撃音のように連続し、寸分違わず同じ形・大きさに切り揃えられたナスやサツマイモたちが吸い込まれるように隣の鍋に滑りこんでいく。さすがにこんな神業はユーキャンでも教えてくれない。英霊ランスロットがその肉体に染み付くほどに修練を極め、固有スキルにまで昇華された『無窮の武練』による恩恵だ。まあ、まさかランスロットも野菜を切るために使われるとは夢にも思っていなかっただろうが。

(この手応えからするに、俺でも『無窮の武練』は使えるな。これで戦闘は心配いらないわけだ。『騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー)』もあるし)

大量の野菜をものの数秒で片付け、次に鶏肉の下ごしらえにとりかかりながら手に持つ包丁を眺める。肉切り包丁は葉脈のような黒い筋が血管のように表面に浮かび、墨汁に漬けたように黒く染まっている。切れ味も恐ろしいくらいに上がっているが、同じく俺が触れているまな板も宝具化しているので傷ついたり割れることはない。手にしたモノをなんであれ己の宝具とするスキル『騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー)』も、中身が俺になっても引き継がれている。まさかランスロットも包丁とまな板を(r y

さて、戦闘に支障がないとすれば、問題はどいつとどの順番で戦い、勝利するかだ。第四次聖杯戦争のサーヴァントは強者揃いだからなかなか悩ましい。

セイバーはアーサー・ペンドラゴン。切り札は『エクスカリバ約束された勝利の剣¹』

ライダーはイスカンダル。切り札は『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』

アーチャーはギルガメッシュ。切り札は『エヌマエリシュ天地乖離す開闢の星』

ランサーはデイルムツド・オディナ。切り札は『ガイ・ジャルグ破魔の紅薔薇』と『ガイ・ボウ必滅の黄薔薇』。

キャスターはジル・ド・レエ。切り札(?)は『ブレラィティーズ・スベルブック螺湮城教本』。

アサシンはハサン・サツバーハ。切り札(?)は『ザバーニヤ妄想幻像』。

特にこのメンツの中でもギルガメッシュは規格外で、3つの令呪全ての補助を受けたライダーのEX宝具を跳ね除け、その後すぐさまセイバーに挑まれてなお余裕を崩さないというチートっぷりだった。こいつを倒すには俺一人じゃ無理だ。他人の宝具を自分のものに出来る俺は上手く立ち回れるだろうが、物量で来られるとジリ貧だ。複数のサーヴァントを同時にぶつけて弱らせた後で挑むか、誰かと協力して一気に畳み掛けるしかないだろう。

だが、俺が一番厄介に思っているのはギルガメッシュではなく、

(ランサーをどうすつか、だな)

鍋をかき混ぜながら、ぐるると低く嘆息する。ランサーのガイ・ジヤルグは触れたものの魔力を消失させる能力を持っている。俺のナイト・オブ・オーナーとの相性は最悪だ。バーサーカークラスという縛りのためにランスロット固有の宝具『アロンダイト無毀なる湖光』が使えな

い以上、その辺のモノを宝具化して武器にするしかないのだが、ランサーの前では無力化されてしまう。Fate/ZERO解説本でも「バーサーカーにとつてランサーは天敵」と記されていたし、こいつがいる限りはギルガメッシュにすら辿りつけないのだ。聖杯を手に入れるためにも、まずはランサーの打倒を優先して　　って、待てよ？

(しまった！！聖杯使えないんだった！！)

ガン！と頭を抱えてその場に蹲る。禍々しい黒騎士が床で丸まって苦悩する様は傍から見たらかなりシユールかもしれない。

そう、聖杯は第三次聖杯戦争の際のアリマユによる汚染によって悪しき願望機に変質してしまっているのだ。従って、「桜を助けろ」という願いも負の方向に曲解され、不幸な結果になる可能性が高い。どんな清廉な願いも、『この世の全ての悪』というフィルターを通せば全て破壊的な思惟を含んだものにされて叶えられてしまう。これは参ったぞ。雁夜おじさんは聖杯が役立たずだとは知らないし、言葉も話せない俺が聖杯に頼るなど説得できるはずもない。出来た所でなんでサーヴァントがそんなこと知ってるのかと訝しまれるだけだ。元より、聖杯以外に残り時間の少ない桜の命を助ける方法が现阶段では何も思いつかない。八方塞がりだ。桜を助けて、雁夜おじさんを幸せにするためにはどうすればいいのやら……。

ぐつぐつぐつ

鍋が激しく沸騰する音がヘルメット越しに鼓膜に滑りこみ、慌てて立ち上がる。強火のまま沸騰させすぎると野菜が崩れてしまう。弱火にして形を保たなくては、せつかくの栄養が溶けてしまう。せめて二人には美味しい飯を食って元気な姿を見せてもらいたい。

菜箸で野菜の硬さ加減をチェックしようとして　　唐突に、良い

案を思いついた。

（そうだ、この手があった！これなら、聖杯に頼らなくても二人の命を救えるかもしれん！）

そうと決めればさっそく料理に励まなくてはと、バーサーカーは工プロンを締め直すと嬉々として腕を振るった。やはりひどくシュールな光景だった。

±雁夜おじさんサイド±

「あの馬鹿には一度キツク言っておかないとな」

復活した雁夜が廊下をのしのと大股で歩いていた。その元気な足取りには先日までの刻印蟲による衰弱は見られない。固形物が喉を通らず、流動食やブドウ糖の摂取しかできなくなっていた状態が嘘のようだ。雁夜本人にも回復の理由はわからなかったが、深く考えてもいなかった。今はバーサーカーにどう説教をしてやるうかという考えで頭がいっぱいだったからだ。

（バーサーカーにはサーヴァントとしての自覚が足りない！一体全体、元はどんな英霊だったんだ！？）

プンスカと頭から湯気が出そうなほどに憤慨する。バーサーカーからは緊張感というものが感じられない。戦争中に平気で買物に行くなんてどうかしている。本当に戦えるのかすら疑問に思ってきた。

「ん？なんだか良い匂いがするな。こっちか？」

不意に、何か煮える良い匂いが漂ってきた。香辛料とハーブが鼻奥をツンと心地よく刺激する、食欲をそそる香り。魔術のせいで半ば麻痺した嗅覚でもわかる手料理の温もりと優しさに思わず立ち止まり、雁夜は出所までフラフラと引き寄せられる。行き着いた先は厨房だった。かつて、まだ雁夜たちの母親が生きていた頃、愛情を料理に変えて与えてくれたことがあった。例え陰惨な血筋に生まれながらも、そこには純粋な子どもへの慈しみがあつた。知らず潤んだ目をこすってドアを開ければ、そこには優しい母の背中ではなく、

「やっぱりお前か」

「うう？」

屈強な鎧騎士の背中がキッチンを支配していた。天井を突かんばかりの長身が雁夜に気付いて振りかえる。表情の見えぬ目庇の奥の瞳が「元氣そうじゃないか」と朗らかに笑った気がした。雁夜はその優しさに怒る気力を削がれかけたが、これからのことを考えてしっかりと戒めておくことにした。

「おいバーサーカー！お前が見た目と違って温和なことはよくわかったが、もっとサーヴァントらしく緊張感を持って ……」

語尾に至るに連れて小さくなってゆく。眉根を寄せる雁夜の視線の先には、鍋があつた。漆黒に艶めき、鍋とは思えない存在感と迫力を放つ鍋が。表面に走る血脈のような筋はバーサーカーの手から伸びている。雁夜はマスターに与えられるステータス透視能力によって、その力の本質を見ることが出来た。

（バーサーカーが手にしたモノは、なんであれバーサーカーの宝具

になるのか！)

あらゆるモノを己の武器に変えて戦える。この街にありふれる全てのモノがバーサーカーの手札となる。それは無尽蔵の宝具を所有しているに等しい。雁夜は改めて、自分の召喚したサーヴァントが得難い強力な強者であることを思い知った。

先ほどまでバーサーカーの力量を疑っていた自分が恥ずかしい。彼と一緒にいれば間違いなく、この戦争で優勢に立ちまわることが出来る。

「凄い！これなら、きっと聖杯を手に入れることが　その小鉢はなんだ、バーサーカー」

勝利を確信して興奮する雁夜に、バーサーカーが黒い鍋の中でポコポコと沸騰する緑色の何かを小鉢に掬い、ガシヤガシヤと鎧を鳴らしながら近づいてくる。スープ状のそれが小鉢の中でドロドロと揺れる。

「味見しろとも言うのか！？明らかに怪しいだろそれ！自分ですればいいじゃないか！？」

「ううう」

「ヘルメットがあつて出来ない！？脱げばいいだろうが！うわ近づけるな顎を掴むな無理やり飲ませるなやめろおおおおおおおおお！お！お！お！」

……

……

：

「美味しいね、このグリーンカレー。ね、雁夜おじさん」

「ああ、美味しい。腹立たしいくらい美味しい」

カレーだった。普通のカレーではなく、ハーブを用いたグリーンカレーだ。ご丁寧に具は全て細かく切られていて、病人の俺たちにも食べやすいように配慮がなされている。特に固形物を食べるのが困難だった俺はあまり噛まなくてもいい料理はとても嬉しい。今朝のおかゆ然り、バーサーカーは俺の体調を詳しく把握しているらしい。サーヴァントにはマスターの健康状態も伝わるのだろうか。

「うーん？」

「うん、すつごく美味しいよ、バーサーカー。すぐに元気になれそう」

桜の言うとおり、味は絶品だ。そこらの店で二束三文で食べられるようなものじゃない。香辛料とココナッツミルクが奏でる爽やかな辛さが味覚を様々な角度から刺激し、脳を喜ばせる。何度口に運んでも一向に飽きが来ない。さらに、ただ単に舌を楽しませるだけに留まらず、栄養もたっぷりと入っている。不足していた滋養が片っ端から満たされていくのがわかる。例えるならば、餓死寸前に食べた一切れのチョコレートのような、活力が身体の中から末端までじんわりと広がってゆく充足感だろうか。それを噛み締めるたびに感じる。心の底から食べてくれる人間のことを思っ作られたものだということがよくわかる。本当に美味しい。こんなに心のこもった料理は久しぶりに食べた。

思わず視界がゆらゆらと水面のように揺らめく。

「雁夜おじさん、泣いてるの？どこか痛いのか？」

「だ、大丈夫だよ、桜ちゃん。ちょっと、辛さが目に染みちゃって
はは、情けないね」

「ぐるる〜m9(^(^)(」

「お前は黙ってる!」

「ぐるる(、・、)……っご?」

しよげるバーサーカーの腕に、小さな手が触れた。桜がおずおずと
バーサーカーの手を握る。その頬は桜色に火照っている。

「あ、あのね?私、バーサーカーくらい料理が上手になりたいの。
そしたら、そしたら……」

俯き、もじもじと身を擦らせる少女。雁夜は激しく嫌な予感を感じ
た。

「バーサーカーのお嫁さんにしてくれる!」

「なん…だと…!」

その時、雁夜に電流走る。

「ダメです!絶対ダメ!」

「おじさん、愛には歳の差なんて関係ないんだよ?」

「歳の差以前の問題です!どこで覚えたのそんな台詞!」

「お姉ちゃん」

「おいしいiiiiiiii!!なに教えてんの凜ちゃんんん!!ほら、
バーサーカーも何か言っちゃれ!!」

「ぐるる(*、*」

「照れてるんじゃないっ!」

照れくさそうに後ろ頭を掻くバーサーカーを叱責しながら、しかし、

雁夜は暖かな満足感を感じていた。親しみと信頼があればこそ不快でない怒り。こんな感情を抱いたのはいつたいつた何時ぶりだろうか。バーサーカーに怒る雁夜を見て、桜がクスクスと笑う。釣られて雁夜も笑ってしまう。それはまるで普通の家族の食事風景のようだった。雁夜が喉から手が出るほど欲し、決して手に入れることが許されなかったささやかな日常が、そこにあった。それをもたらしたのが人外の亡霊であっても、雁夜は嬉しかった。

「……………ありがとな、バーサーカー」

小声で告げた感謝の言葉に、バーサーカーは小さく親指を立てて応えた。彼とは良い友人になれそうだ。

「バーサーカーのご飯のおかげでだいぶ楽になったよ。栄養士の資格とか持ってるの？」

「ぐるる（肯定）」

「……………冗談だよな？」

……………

……………

…

「行くのか、バーサーカー」

深夜。

雁夜の緊張を孕んだ問いに、バーサーカーが静かに頷く。全身から

放たれる気迫は彼の戦意の充溢に他ならない。
街中に散開させた使い魔の情報で、港湾区画の倉庫街でサーヴァン
ト三体が睨み合いをしていることがわかった。セイバー、ランサー、
ライダーの三体だ。特にセイバーは最優のサーヴァントと称され、
聖杯を求めるにあたっては必ず倒さねばならない障害となる。先の
ランサーとの戦いで消耗している今がセイバーを倒す好機かも知れ
ない。

(何より、俺たちには時間がない)

傍で寝息を立てる桜の髪を撫でる。滑らかだった髪質は今や針金の
ように固く、見る影もない。脱落者が出るのを待っている間にも桜
の容態は刻々と悪化していく。漁夫の利を狙う余裕はない。一刻も
早く聖杯を手に入れる必要がある。そのためには、こちらから積極
的に動くしかない。

「バーサーカー、俺は桜の元から離れられない。臓硯も兄貴もいな
い今、この家は無防備だ。桜を残してはいけない。お前一人を戦わ
せることは忍びないが」

「ぐるるっ」

「お前……」

申し訳なさそうな雁夜の台詞をバーサーカーは手で制した。燃える
双眸が「何も言うな、わかってる」と言っている。

(いいだろう。もはや何も言うまい。俺はお前に全てを託す)

俺の決意を確認したバーサーカーが踵を返す。踏み出した脚が黒い
霧となり、霊体化していく。彼はこれから戦地に赴く。俺の願いを
叶えるために。桜の命を救うために。

「頼んだぞ。……明日の朝食、俺も桜も楽しみにしてるからな」

実体化が解ける寸前、バーサーカーが首だけでこちらを振り返る。ヘルメットの下の容貌が、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた気がした。大丈夫だ、彼ならきつと、勝利を掴める。俺が魔力切れを起こさなければ、彼は全力で戦える。彼の足を引っ張らないためにも俺も死力を尽くさなければならぬ。

バーサーカーの気配が消えると、俺はすぐに使い魔の蟲たち全てを家中にスタンバイさせる。侵入者があればこいつらが対処する。バーサーカーが戻るまでの時間稼ぎくらいは出来るだろう。

よし、と覚悟を決めると、ベッドの傍の椅子に座って精神を集中させる。肉体深くまで寄生した無数の刻印蟲に意識を繋げ、活動を活性化させる。途端、指令を与えられた蟲たちが俺の体力と生命力を蝕み、それを対価にして魔力を生成していく。それが伴う激痛は想像を遥かに超える。

「がっ、うぐっ！……こんなものじゃダメだ！もっと、もっと魔力を送らなければ……！！」

勝機を増やすために、バーサーカーに送る魔力を少しでも多くするためにも、これ以上の激痛に堪えなければならない。肉を削ぎ落とされ、剥き出しにされた骨に塩を擦りつけられているような、精神をゴリゴリと削る圧倒的な激痛の奔流が絶えず雁夜を襲う。血涙が頬を流れ、口端から血の泡が吹きこぼれる。身体中が細かく痙攣し、手足の感覚が死に引きずられるように失せていく。

「……………と……………さん……………」

「……………！？」

ともすれば飲み込まれそうな意識の中、暖かな感触を太ももに感じた。赤く濁った目で見やれば、寝ぼけた桜の手が雁夜の足にそっと触れていた。

「お父さん……」

「……」

眼光が輝き、腹腔で熱が灯るのを知覚する。五臓六腑から力が湧き拡がって消えかけていた手足の感覚を取り戻す。気力を振り絞って意識を奮い起こした雁夜の口元が、不敵な笑みを浮かべた。大丈夫だ。この娘のためなら、どんな痛みにも堪えられる。

口元の血を袖で拭い、雁夜は再び精神を集中させる。視界がバーサーカーと繋がる。眼前には、三体のサーヴァントと、いつの間にか現れていたアーチャーの姿があった。その場にいた全員の視線がこちらに集中する。どいつもこいつも強そうだ。選り取り見取りじゃないか。

(さあ　　始めよう、バーサーカー!!)

1 - 3 健康は毎日の食事から（後書き）

雁夜おじさんも桜も生かす方法は、感想コメントから思い浮かびました。感謝ですm（）（）m

1 - 5 ケイネス先生の中の人ひとりっぴいと同じ（前書き）

僕もヴァレンシュタイン元帥とかテレゼ皇女様の下で艦隊率いて戦いたいなあ。

そうそう、コメントでたくさんのご指摘を頂きました。バーサーカーの能力とか宝具とか制限とか色々と間違ってるみたいです。……小まげえことはいいんだよ！！（A A 略

これはある男の夢の話なので、ちよつとした違いもあるのです。そういうことにしてくださいませえ！ノリと勢い！それが一番大事！

ることが出来うる状況に、ケイネスの口端が自然と持ち上がる。

だが、その目論見はよりにもよって己のサーヴァントによって覆される。

鼓膜を切り裂く衝突音を響かせ、ランサーがバーサーカーの刀剣を華麗な槍捌きでもって跳ね除けたのだ。

「悪ふざけはその程度にしておうか、バーサーカー。そのセイバーには、この俺との先約があつてな。これ以上つまらん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙つてはおらんぞ？」

「ランサー……」

好敵手と認めた相手には最大の敬意を払う。美しい青年騎士はまさに伝承通りの高潔さに満ち溢れていた。その騎士道精神を前にして、ケイネスは舌打ちをして「愚か者め」と奥歯を噛み締める。

ランサー……かつて主の妻を寝取り、裏切り、同胞を尽く殺した篡奪の騎士、デイルムッド・オディナのことを元から信用していなかったケイネスは、ランサーに全幅の信頼を置いているわけではなかった。いわんや、彼の掲げる騎士道や忠義にも懐疑心を抱いていた。

（使い魔風情が、騎士道などと身分不相応なものを掲げおつて）

苛立ちを胸に左手の令呪を見る。初戦で切り札を使う羽目になってしまうのは些か不本意ではあるが、これからの戦争をより有利に進められるのならば安いものだ。一秒にも満たない時間でそう決断すると、声帯に指先をあてがい、次に眼前で空に魔方陣を描いて声の拡散と幻覚処置を行う。幾重もの隠蔽魔術を維持してなお自由に魔術が使えるのは、サーヴァントへの魔力供給を妻に担ってもらった結果である。

『何をしている、ランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機である』

「……っ！ セイバーは、必ずやこのデイルムツド・オディナが誇りに賭けて討ち果たします！何となれば、そこな狂犬めも先に仕留めてご覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に……！」

『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを殺せ。令呪をもって命ずる』

（誇りだと？それこそ、使い魔にはもつとも相応しくないものだ）

ふん、と冷たく鼻を鳴らすケイネスの左手から令呪の一角が透けるように消えてゆく。これで、ランサーは馬鹿げた騎士ごっこをやめてケイネスに忠実な使い魔となった。視力強化の魔術でランサーのご立派な美貌に注目すれば、いかにも無念そうな顔を浮かべながらも槍の英霊の名に恥じない槍技を行使してセイバーに襲いかかる。最初からそうしていれば令呪を使う必要もなかったのだ。つまりない意地を張るから結局、主人の手を煩わせることになる。ランサーの語る騎士道などはしよせんその程度であり、極論すればただの自己満足、自慰行為でしかないのだ。

じりじりとセイバーとの距離を詰めるランサーの隣に、バーサーカーが並び立つ。狂戦士の攻撃対象がランサーに移ることを警戒していたが、やはりセイバー以外には見向きもしない。尋常の思考が当て嵌まらないのは、さすがバーサーカーと言ったところか。あれのマスターはきつと持て余しているに違いない。

狂犬と呼び捨てた者と剣の向きを揃えることになったランサーの表情がさらに険しくなるのを観察しながら、ケイネスは身の内で恍惚が膨れ上がるのを感じた。妻、ソラウがランサーに向ける恋慕の眼差しに薄々感づいていたケイネスは、ランサーが屈辱に歯噛みする様を見ることで気を紛らわせていた。

「……アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に、せめて貴女だけでも離脱して下さい。出来る限り遠くまで」

セイバーの言葉は淡々としていて、しかし自分たちが極めて切迫した状況にあると自覚している証だった。聴覚強化と集音の魔術でその台詞を耳にしたケイネスは勝利を確信する。

（殺せ！）

ケイネスの内心の叫びに反応したかのように、ランサーとバーサーカーが同時に地を蹴る。

ランサーの双槍が刺突の構えでセイバーに向かって突き出され、バーサーカーの剣の切っ先がこちらに向かって振り上げられ、

「え？」

次の瞬間、視界を潰す閃光。鼓膜を遮る爆音。総身を震わす激震。崩れ落ちる足場。落下してゆく浮遊感。身を押し潰してくる冷たい鉄骨。肉が張り裂ける痛み。

（そうか、バーサーカーは最初から　　）

そこで、ケイネスの意識は途絶えた。

キウエイバーサイド

「……なんだあ？」

ライダーの呆けた声にその場にいた全員がハツとさせられる。つい今しがたまで絶体絶命の状況に陥っていたセイバーも、彼女を仕留めようとしていたランサーも、ぽかんと口を開いてただ一点を見つめている。それも無理はないと思う。

全員の視線が集まる先　　バーサーカーが、突如身を180度反転させ、何を思ったか持っていた剣をセイバーとは真逆の見当外れな方向にぶん投げたからだ。

元はアーチャーの宝具だった剣は300ヤードほど離れた倉庫の一角に着弾し、直後、雷鳴に似た爆音と閃光を鳴り響かせた。直撃を受けた倉庫が音を立てて崩れ落ち、土煙を激しく舞わせる。バーサーカーの行動を理解できず、誰も口を開かない。そもそも理性を失った者の行動に理由を求めること自体が間違っているのかもしれない。狂戦士の狂戦士たる由縁を見せつけられ、誰もが呆気に取られる中、一人が悲鳴じみた声を上げる。

「ケイネス殿ッ!?!」

ランサーの叫びだった。崩壊する倉庫を睽目して見つめる焦燥の顔で、ようやく察する。バーサーカーが宝具を投げた先に、ランサーのマスターがいたことを。

「バーサーカー、貴様ッ!　　なっ!?!」

「な、何してんだアイツ!?!」

思わずウェイバーも驚愕の声を上げる。主君を害した敵に憤怒の形相を向けたランサーの前で、バーサーカーが呆気なく構えを解いた

のだ。片手に保持したままのアーチャーの短刀が降ろされる。今までのセイバーに対する雄叫びや苛烈な攻撃が嘘のように静まったその姿は、誰構わず喰らいつく狂犬というより、主人の命令に忠実な“闘犬”を連想させた。

「なるほどな。そういうことか」

頭の上から降ってきた一人で納得していやがるライダーの声に、説明と抗議の視線を発射する。精一杯の嫌味を込めた視線を難なく受け止めたライダーがさも愉快そうに破顔し、答える。

「わからんか、坊主。あ奴の狙いは最初からランサーのマスターだったのだ。ランサーがセイバーに釘付けにされ、マスターがもっとも無防備になった瞬間を突いたのだ」

「な、なに言ってるんだよ！バーサーカーにそんな器用な真似が出来るはずないじゃないか!？」

バーサーカークラスの特徴は、その名の通り“狂っていること”だ。理性がないのだから、戦術もクソもない。偶然の可能性の方が高いんじゃないのか？

そんなウェイバーの反論に、ライダーは「その通り、バーサーカーには出来ん」と頷く。

「ならば、仕組んだのはあ奴のマスターということになる」

「マスター……」

ここに来てようやく、ウェイバーは事態を把握するに至った。バーサーカーがセイバーに突然襲いかかったように見えたのは、ランサー陣営を油断させるためにバーサーカーのマスターが張った罠だったのだ。攻撃を仕掛ける時ほど人間は無防備になる。ケイネスも同

様であり、最強の武器であり防具でもあるサーヴァントをセイバーに向けた無防備な瞬間を狙い、バーサーカーに攻撃させたのだ。

（だけど、これはケイネスの魔術迷彩を完全に看破してないと出来ない作戦じゃないか！バーサーカーのマスターの魔術師としての腕はケイネスを超えるのか！？）

ケイネスの才覚はウェイバーもよく知っている。世界に名だたる時計塔の講師は伊達ではなく、間違いなく現代でトップクラスの魔術師だ。陰湿な性格は用心深さの裏返しでもあり、こと己の身を守るための魔術迷彩に手を抜くことなど有り得ない。念には念を入れた巧妙な隠蔽魔術を幾重にも身に纏っていたはずだ。ウェイバーが10年間かけても見破ることが出来ないだろう隠蔽魔術を、バーサーカーのマスターは瞬時に看破し、それすら利用した戦術を構築し、実行したのだ。

超えるべき大きな壁だと思っていたケイネスを難なく脱落させた未だ見ぬ強敵の出現に身を震わせるウェイバーに、ライダーは笑いかける。

「それに見てみる、坊主。あの暴れ馬の手綱も見事に握っておる。あ奴のマスターは獣の躰に関して上等のようだ」

その言葉にバーサーカーを凝視すれば、ランサーの槍の間合いにいるにも関わらず微動だにもしていない。まるで「待て」と命じられた軍用犬のようだ。バーサーカーは特に扱いが難しいクラスとして知られる。操るには相応の魔力と精神力が必要とされるが、今回のバーサーカーのマスターにはその両方が備わっているらしい。魔術師としての才、マスターとしての才。自分が十全に持っているとは言えないそれらを完璧に併せ持つ強敵が、どこかからこの戦場を見下ろしている。遙か高みから値踏みをされているような錯覚に、ウ

エイバーはゴクリと喉を鳴らす。

(…………?)

鳴らして、決して凡愚ではないウェイバーは目の前の違和感に気付いた。

「お、おのれっ…………！」

ランサーが、動かないのだ。殺意に満ちた眼差しと槍先をバーサーカーに向けてはいても、切っ先がバーサーカーに突き刺さることはない。それどころかケイネスを助けにも行かない。現世との楔の役割を担うマスターを失えば、サーヴァントは現界し続けることができな。サーヴァントにとってもマスターの存在は必要不可欠だ。だというのに、ランサーは何かの圧力に抗うかのようにその場でただ身体を震わせるだけだ。騎士道を重んじるこのランサーが、主を助けもせず、主の仇も討とうとしないのはどうということなのか？

(そうか、令呪か！)

先ほどケイネスが令呪によって行った命令 『セイバーを殺せ』が、皮肉にもランサーの動きを制限しているのだ。今のランサーは、マスターから別の命令がなければセイバーのみを殺すという行動しか出来ない。だから、目の前のバーサーカーに斬りつけることもできない。

「でも、それならどうして、今の内にバーサーカーをセイバーにぶつけないんだ…………？ランサーに令呪がかけられている今なら共闘でセイバーを倒せる。ケイネスが死んでいればランサーも自動的に消えることになるし、漁夫の利じゃないか」

「それはな、坊主。バーサーカーのマスターが戦場の華の愛で方を心得た粹な奴ということか、それとも」

知らずに漏れたウェイバーの呟きに応えたライダーの目が、すつと細められる。

「セイバーを温存させる方がこれからの展開に都合が良いと踏んだか、だな」

「……!!」

最優のセイバーを残しておけば勝手にライバルを減らしてくれる。あの強大なアーチャーに手傷でも負わせてくれれば、バーサーカーの勝機も増える。アーチャーに対して有利に立ち回っていたバーサーカーなら、相手が弱つていれば勝てるかもしれない。だから、敢えてセイバーを脱落させなかった……。

先ほどまでの自分なら偶然だと一笑に付したかもしれないが、今はそんなことは出来ない。自分の才能を周囲より高く評価する傾向のあるウェイバーだが、今は見えない敵が張り巡らす老獪な知略を理解するので精一杯だった。

「一つ確かだと言えることは、少なくとも一騎のサーヴァントが、ここで脱落するということだろう。」

「ランサー!？」

「くっ……!!」

セイバーがぎょつとした顔でランサーを睽目し、ランサーも己の身体を見下ろして歯噛みする。おそらく、近距離にいるセイバーは気付いたのだろう。ランサーの血肉を形作る魔力が激減し始めていることを。現世との繋がりが見切れた結果だ。やはり、ケイネスは先の攻撃で命を落としたのだ。ギリ、と奥歯を噛み締めてランサーが今

一度バーサーカーを睨みつける。相変わらず、バーサーカーはじつと佇んだままだ。

バーサーカーに動く気配がないことを認めたランサーが、踵を返してセイバーと正体する。

「セイバー、もはや俺に時間は残されていない。聖杯を献上できなかった、御守できなかった、仇を討てなかった。このままでは我が主にあまりに面目が立たない。せめて、主が望まれたお前の首級は取らせてもらう。狂犬にお膳立てされたことは気に食わないが、付き合ってもらおうぞ」

セイバーもバーサーカーに苦い一瞥を送る。彼女もバーサーカー陣営に謀られたことに気付いたのだろう。不本意な死合いに納得しかねる表情をチラと垣間見せ、すぐにそれを消して好敵手の決死の申し出に剣を構えて応える。

「……いいだろう。私も些か不満は残るが、あなたとは決着をつけておきたい。行くぞ、ランサー！」

「感謝するぞ、セイバー。いざ、参るッ!!」

声高らかに言い放つと、セイバーとランサーが同時に地を蹴る。7ヤードの距離を一瞬で0にして、両者が必殺の一撃を放つ。大上段に振り上げられた不可視の剣と矢のように引き絞られた双槍が、すれ違いざまに火花を散らせながら互いの急所を狙う。

二騎の交差は一瞬で、ただ一度だけだった。

「見事だ、セイバー」

果たして、膝をついたのはランサーだった。胸に真一文字に走る傷は見た目にも致命傷で、だというのにその顔には自嘲とも清々しさ

とも取れる笑みが浮かんでいる。

マスターを失ったことよって現世から切り離される寸前のランサーは、もはや令呪という補助動力で動いているようなものだ。そして、セイバーは補助のみで勝てる相手ではなかった。

背後のランサーに対し、セイバーは振り返らずに背中中で応える。その凜とした後ろ姿に、ウェイバーの頭を“王の背中”という言葉が過ぎる。

「此度の貴方との手合わせは心躍るものだった。出来るならば、再び剣を交えたい。真の決着はその時につけよう。また会おう、サー・デイルムツド」

「ああ、また会おう。騎士王」

サー・デイルムツドと呼ばれた男は、最期に静かに目を閉じるとやがて音もなく消え失せた。敗北したというのにどこか満足気な微笑を浮かべていた彼は、もしかしたら仕えたい主を見つけたのかもしれない。

そんな救われたような表情で去ったランサーとは対照的に、セイバーの表情は今も険しいままだ。なぜなら彼女のすぐ正面に、ランサーが倒れるように仕向けた者　バーサーカーがいるからだ。ギリ、とセイバーの剣を握る両手に力が漲る。それはランサーとの戦いで受けた傷が回復したことを意味する。今なら彼女は全力でバーサーカーと戦える。対するバーサーカーの得物はアーチャーの短刀のみ。

（さあ、どう出るんだ？バーサーカーのマスター！）

ウェイバーはバーサーカーを介して戦場を差配しているであろう敵のマスターの思考を読み取るのと戦車から身を乗り出して刮目する。行動を注視し、パターンを分析し、対策をとれば、如何なる相手で

も恐れることはない。セイバーとの戦いを見て何か掴めれば、バーサーカーの対処法も自ずと見えてくる。

しかし、相手はやはり一筋縄では行かなかった。

「貴様、逃げるかッ！」

「ほお。引き際も心得てるとは、なかなかどうして、敵であることが惜しい奴よ」

敵前逃亡に吠えるセイバーの眼前で、バーサーカーが黒い霧と化して掻き消えてゆく。まるでランサーの死に様を看取ったかのように、敵かにこの場を去る姿に、ライダーが感嘆の声を上げる。一方、ウェイバーは尻尾も掴ませない敵の周到さに齒噛みしていた。

（せめて、バーサーカーの宝具のヒントだけでも掴みたかった）

セイバーもアーチャーも切り札の宝具を垣間見せ、ライダーに至っては真名を晒してくれやがった。一方、バーサーカーは飛来する武器を掴みとって戦えるほどの類稀なる戦闘技術を有するということ以外には何の手の内も見せていない。戦闘で消費した魔力も一番低いだろう。さらに、バーサーカーの手にはアーチャーから奪った宝具が握られたままだ。まさに一人勝ち状態だ。初戦で勝利したのはセイバー陣営だが、制していたのはバーサーカー陣営だと言っても過言ではない。

「……a^アer……」

消える直前、バーサーカーが掠れ切った声で呻く。今度は何を言うのかとセイバーが身構え、

「ahogge」

「き、貴様ツ！？これはアホ毛などではないぞ！こら逃げるな待て！」

顔を真っ赤にしたセイバーがぶんぶんと不可視の剣を振り回すが、時すでにお寿司。イカスミのような黒い霧は闇に溶け、バーサーカーの気配も完全に失せた後だった。それでもセイバーは頭上のアホ毛を左右に揺らしながらバーサーカーがいた空間をメッタ斬りにする。

「貧乳やらナイチチやら、私を馬鹿にしているのか！バーサーカーのくせに私を罵倒する時だけはハッキリ喋るとはどういうことだ！だいたい大きな胸の何が良いのだ！あんなものただの飾りだ！」

「セイバー、落ち着いて！大丈夫、どんな胸にも需要はあるから！」

「アイリスフィール、それはフオローになっていない！」

「ぶはははは！たしかに王のくせに貧相な乳をしているな！」

「き、貴様　　！！！」

セイバーを落ち着かせようとして逆に火に油を注ぐマスターと、それを指さしてゲラゲラヒーヒーと腹を抱えて笑い出すライダー。とても戦争中には見えない珍妙な光景を前に、ウェイバーは大きなため息について夜空を見上げ、呟く。

「聖杯戦争つて、こんなノリでいいのかなあ？」

多分よくない。

キ切嗣サイドキ

「……無事か、舞弥」

物陰にじつと身を伏せていた切嗣が押し殺して声でインカムの向こうにいる舞弥を呼ぶ。返答を待つ間、切嗣はつい先ほど起きた衝撃的な出来事を顧みる。

セイバーの劣勢を覆そうと、ランサーのマスター　　ケイネスの狙撃を決意し、引き金に力を込めた瞬間、スコープの中のケイネスが爆発に飲み込まれて掻き消えたのだ。あれほどの爆発と倒壊だ。死んだに違いない。そしてその原因を探ると、なんとバーサーカーによるものだということがわかった。それを理解した瞬間、切嗣と舞弥は慌ててその場を離れ、物陰に身を隠して息を殺し、五感を総動員して周囲を警戒した。あれほど隠蔽魔術を駆使して身を隠していたケイネスですら補足されたのだから、当然、自分たちの位置も見抜いたのではないかと。

「舞弥？返事を　　」

『こちらは、問題ありません。ランサーは脱落、バーサーカーもすでに撤退したようです』

窮屈そうな声で、舞弥が返事をした。どこか狭所に隠れて戦場を監視しているらしい。お互い無事なところを見ると、自分たちは見つからなかったらしい。

（もしくは、見逃されたか）

後者の可能性を考えて知らずにゴクリと唾を嚥下した切嗣が、戦場の様子を確認するために再び狙撃位置まで戻り、銃のスコープを覗く。

そこには、なぜか大爆笑しながら戦車を駆って空へ逃げてゆくライダーたちと、彼らに向かって風の斬撃を飛ばしまくる怒り顔のセイ

バーが映っていた。

「……状況はさっぱりよくわからないが、僕たちは動いてもよさそう。舞弥、念のためにサブの合流地点で会おう。調べ直さないといけないことが出てきた」

『バーサーカーのマスター……間桐雁夜、ですね』

「ああ、そうだ。付け焼刃の魔術師だと甘く見ていたが、どうやら違うらしい」

一頻り今後の方針を伝えて通信を終えると、切嗣は手早く狙撃銃を分解してアルミケースに収納し、合流予定場所に向かう。

消去法で考えて、バーサーカーのマスターが間桐雁夜であろうことは予想がついていた。即席の魔術師ならば狂化スキルでステータスアップが出来るバーサーカーのクラスを選ぶことも想定内だ。だから、切嗣は間桐雁夜のことを“当主を継がなかった落伍者が戦争のために呼び戻されたに過ぎない”と判断していた。今、それが大きな間違いであったことに気づき、己の浅薄さを悔いている。ランサー陣営を容易に脱落させる実力、バーサーカーを完全に操る手腕、あえてセイバーを温存させる戦略構築……並大抵の人間に出来ることではない。

（当主を継がなかったのではない。敢えて家から離れることで注意を逸らし、この戦争のためにじつと修練を重ねてきたんだ。間桐の虎の子、というわけか。言峰綺礼という危険な奴がすでにいるのに、とんでもないダークホースが現れたな）

間桐邸を襲撃する強行案もあったが、相手がこちらより上手の可能性が出てきた以上、白紙に戻す他ない。自分から死地に飛び込むような真似は切嗣がもっとも嫌う愚行だ。より確実に倒せる方法を考えなくては。

切嗣の中で間桐雁夜という巨大な影が膨れ上がる。それが虚像であることを、切嗣は永遠に知ることはない。

「綺礼サイド」

「間桐雁夜、か」

「時臣師はバーサーカーのマスターと面識がおりなのですか？」

教会の一室。通信機から発せられた遠坂時臣の呟きに含む物を感じた綺礼は、それに敏感に反応した。“強敵”の情報は、少しでも多いほうがいい。

「いや。葵　妻の幼なじみだという話は聞いている。実際に目にしたことは数度だけで、会話もない。魔術を嫌って逃げ出した凡愚市井だと、その時は思ったものだったが」

「違った、ということですね」
「ああ、そのようだ。どこが“急造の魔術師”なのやら。間桐の老人も意地の悪いことをする」

バーサーカー陣営の脅威度は、二人の予想を遥かに超えていた。全サーヴァント中最強と確信していたギルガメッシュに一步も引かず、宝具の発現まで追い込んだバーサーカー。そして、バーサーカーをまるで軍用犬のように御して見事に戦場を“演出”してみせたマスター。当初予想していたパワーバランスを大きく崩す敵の出現に、二人は戦略の見直しまで視野に入れ始めていた。

「アサシンを間桐邸に仕向けますか？マスターが外出したという報告はありません。バーサーカーが戻る前に殺すべきかと」

“兵は拙速を尊ぶ”ということは何より経験で理解している元代行者は障害の早急な排除を具申するが、通信機から返ってきた言葉は『いや、やめておこう』だった。

『間桐雁夜を侮るべきではない。あの老人の隠し玉だ。一筋縄では行かない相手だろう。撃退されてアサシンの存在が露見する危険もある』

「しかし……」

『心配せずとも、最強のサーヴァントが英雄王であらせられることに変わりはないさ。セイバーを敢えて残したお手並を拝見させて貰おうじゃないか』

「……はい」

“常に余裕をもって優雅たれ” 遠坂家に伝わる家訓らしい。死と隣り合わせの修羅場をくぐり抜けてきた綺礼とは無縁の規範だ。甚だ理解出来ないが、英雄王ギルガメッシュを有していれば余裕が生まれるのも仕方が無いのかもしれない。不安のため息を飲み下し、綺礼は時臣と今後の方針を確認しあう作業に集中した。

(後でマーボー食べに行こう)

あまり集中していなかった。

±雁夜おじさんサイド±

(ぐるぐる)

「も、戻った、のか。バーサーカー」

ランサーの消滅を見届けたバーサーカーが実体化を解くと同時に、雁夜の魔力負担は激減した。それに合わせ、雁夜の血肉を貪って魔力を生成していた蟲も活動を止める。しかし、そのダメージは甚大ではなく、雁夜は現在椅子に沈み込むようにもたれ掛かり、荒い息を吐いていた。指一本動かす力すら残されておらず、視線を動かすだけで精一杯だ。見れば、バーサーカーは霊体のまま雁夜の傍らに立っているようだった。雁夜へ負担をかけないように気遣っている。その配慮に苦笑する。

「大分、回復してきた。お前のカレーが効いたのかもな。だから、実体化してもいいぞ」

多少のやせ我慢はあるが、嘘でもない。事実、雁夜の体力回復速度は今までに比べて多少早くなっていった。カレーのおかげかは定かではないが、サーヴァントの実体化程度なら許容できるほどには回復した。それに、親しみの持てるバーサーカーには、なるべく実体化して傍にいて貰いたい。雁夜の笑みに余裕を感じ取ったらしいバーサーカーがすつつと湧き上がるように実体化する。

「ぐるる？」

「ああ、大丈夫だ。それより、お前　　アーチャーの宝具を奪って来たのか」

バーサーカーの左手に握られた短刀は、アーチャーとの攻防の最中に彼が奪い取ったものだ。黒い葉脈の侵食は、その宝具の所有権がバーサーカーに乗っ取られていることを示している。それを目に入れた雁夜の口端が卑屈に釣り上がる。

（ははは、奪った。奪ってやった。俺から全てを奪った遠坂時臣か

ら、奪ってやったんだ！)

憔悴しきっていた雁夜の顔に、鋭く暗い嘲笑が刻まれる。負の感情によって燃え上がった生命力が雁夜の口から乾いた笑い声となって吐き出される。

あれだけ圧倒的に見えた黄金のアーチャーを前に、バーサーカーは一步も引かなかった。代々血を重ねて磨きあげた遠坂の魔術に、急造の雁夜が互角に張り合った。それどころか撤退までさせ、あつという間にランサー陣営も脱落させた。バーサーカーを信じていたが、まさか彼にこれほどの戦いの才があるとは思わなかった。遠坂時臣は激しく狼狽したに違いない。今まで見下していた相手に良いように戦いを引っ掻き回され、あまつさえ手柄をとられたのだ。

(俺のバーサーカーから尻尾を巻いて逃げやがった。ざまあみるだ。バーサーカーがいれば、お前のような高慢ちきな奴など怖くない。俺はもう負け犬でも落伍者でもない。そうだ、バーサーカーがいれば、俺を見下していた連中を脅かし、恐怖させてやれる！)

心からの愉悦にくつくつと喉が鳴るのを自覚する。その瞳はじわりと淀み、汚れた情念に染まるうとしていた。

「時臣、貴様の吠え面を見たかったぜ、ははは　　うあだッ!？」

突如、額にガツンと重く鋭い衝撃が走り、雁夜の嘲笑を強制的に止めた。痛みでチカチカと明滅する視界に、漆黒の籠手が見える。それはデコピンの形をしていた。

「グルル……」

「バーサーカー……?」

初めて聞く、狂戦士じみた血に飢えた獣の唸り声に、雁夜はゾツと息を呑む。雁夜を見下ろす双眸から感じる気迫が、いつもよりずっと鋭い。バーサーカーは　怒っている。

（そうだ。俺は……俺は、何を考えていたんだ？桜を救うために協力してくれと言ったくせに、俺は自分の復讐のことしか考えていないのか！？そんなくせに、俺は自分の復讐のことしか考えていないのか！？そんなくせに、俺は自分の復讐のことしか考えていないのか！？そんなくせに、俺は自分の復讐のことしか考えていないのか！？）

なぜバーサーカーが怒ったのかと想像し、答えに至った雁夜は激しく己を恥じた。後悔と悔しさに思わず涙が溢れる。これほどまで自分を浅ましいと感じたことはなかった。

「……すまない、バーサーカー。それと……ありがとう」
「ぐるるっ」

押しつぶさんばかりの剣幕を見せていたバーサーカーがヒラヒラと手を振る。「気にするな」ということだろう。その厚情に雁夜は再び涙を流す。バーサーカーがサーヴァントになつてくれたことは素晴らしい僥倖だ。この戦争を勝ち抜く上で非情に心強いし、何より、道を外れそうになつたら引き戻してくれる得難い友人を得られたのだから。

「……そういえば、バーサーカー。お前、セイバーに襲いかかる時に貧乳とか言わなかつ　ぶべらっ!？」

再び額に衝撃。なぜ、と考える暇もなく、雁夜は強制的に休息の眠りについた。

セイバーサーカーサイドキ

サーヴァントとマスターの感覚って繋がられるんだっけか？俺が貧乳派などというデマが流れると困るし、雁夜おじさんにそう思ってもらうのも心外だ。俺は巨乳派なのだ。大は小を兼ねる。たゆんたゆんしてないオツパイはオツパイとは認めません！セイバーに襲いかかる時に罵倒して冷静さを失わせてやろうと考えた結果がアレだったわけだが、まあまあ上手くはいつてみたいだ。でも雁夜おじさんにそれを説明するのが面倒くさいので、とりあえずデコピンで眠ってもらおう。

「ぶべらっ！？」

うん、よく寝てる。俺にたくさん魔力を送ってくれたから死ぬほど疲れたんだ。だから、つつい目的が時臣おじさんへの復讐へと流されてしまっただよ。ゆっくり休ませてあげよう。

しかし、さっきの戦いは自分でも驚くぐらい偶然が重なっていい方向に進んでくれた。原作やアニメでケイネス先生が潜伏してる位置はだいたいわかってたから、ギルガメッシュが射出してきた宝具から広範囲に渡って爆発しそうなものをチョイスして奪ってやったのだ。それを「あの辺りだったかな？」って方向に投げてみたら見事にドツカーン！なわけですよ。マスターを失ったランサーも消滅してくれました。原作ではソラウが魔力補給担当だったんだけど、やっぱりマスターという繋ぎがないとダメなんだね。こっちは手出しはせずにセイバーと一対一で戦って貰ったら、負けたけどなんか満足そうに消えて行きました。ランサーも原作みたいにならなくてよかったなあ。これも夢補正ってやつなのかもね。

それと、ライダーとウェイバーの会話をこっそり聞いていたけど、なんか雁夜おじさんの評価が鰻登りみたいだ。これも嬉しいことだ。

サーヴァントとして鼻が高いよ。やったね雁夜ちゃん！評価が高いよ！

「ん……バーサーカー……」

桜ちゃんが寝言で俺を呼んでいます。可愛いですね。頭を撫でてやる
とくすぐったそうに微笑みます。大丈夫、君も雁夜おじさんも絶対に
死なせないよ。目覚めの悪い夢にはさせないさ。

アーチャーの短刀を決意を込めて握りしめ、自らの戦場に向かう。
さあ、ここからが俺の本当の戦いだ

！！

キケイネスサイドキ

「こ、ここは……？」

「ああ、よかった！目が覚めたのね！」

「ソラウ？」

ケイネスが目を覚ますと、そこは真っ白な部屋 病院の集中治
療室のようだった。日本語が表示された機材は全てが最新のものら
しく、磨き上げられて清潔だ。それから伸びたコードはケイネス
の身体のありとあらゆる場所に繋がっている。鉛のように重い身体
で声の方に首を動かせば、妻のソラウが涙を浮かべて駆け寄ってき
た。

「私は、バーサーカーのマスターにしてやられて、それから……どうなったんだ？ランサーは？聖杯戦争は？」

何一つ状況がわからないケイネスに、ソラウは心底残念そうな顔で応える。まさに夫を心配する妻そのものだ。このような親身な表情を向けるなど、今までなかったことだ。この異変もケイネスを混乱させた。

「負けたわ。セイバーと戦って。あなたはバーサーカーの攻撃を受けたけど、自動発動した^{ヴァールメン・ハイドロクラム}月霊髄液がクッションになって何とか一命は取り留めたの。そして重症のところをこの病院に担ぎ込まれて、ずっと眠っていたのよ。なんとか回復はしたけど、それでも怪我がひどくて……」

それきり、ソラウが潤んだ瞳で押し黙る。自分に言い辛いことがあるのか。背筋を寒気が走った。

「私は、何か取り返しがつかないダメージを負ってしまったのか？」
「……全身を大やけどしたの。しばらくリハビリをすれば動けるようにはなるし、魔術回路も無事だけど、もう元の姿には……」
「……そう、か」

自分の顔に愛着がなかった、と言えば嘘になる。決して美貌ではなかったが、才能と経験に裏打ちされた知性を感じさせる容貌ではあったと思う。自分の顔を失ってショックを覚えない人間はいない。

（だが、私はそんな凡庸な人間ではない。どんな顔になろうが、私がケイネス・エルメロイ・アーツボルトであることに変わりはない！）

己を叱咤して、つくくしゃりと歪みそうになった表情を引き締める。なぜかはわからないが、ソラウが自分に対して素直に好感情を向けてくれるようになった。想い人が自分を好くようになってくれたのだ。一番欲しかったものを手に入れたとも言える。顔を失っても、それを上回る収穫はあった。

(やはり、ソラウはランサーの呪われた黒子に操られていただけなのだ。ランサーがいなくなったから、正気に戻ったのだ)

チラ、と視線をソラウに流せば、ソラウはなぜだかうつとりと陶醉するようにケイネスの顔を眺めていた。ベッドの枕元に両肘を突き、ニマニマと満面の笑みを浮かべている。焼け爛れた顔の何がそんなに嬉しいのだろうか。一抹の疑念を感じつつ、妻に告げる。

「ソラウ、鏡をくれないか。自分の顔を見たい。どんな顔になったのか、知っておくべきだ」

「ええ、いいわよ」

弾むように返答をして鏡を持ってくるソラウに再び首を傾げつつ、鈍い動きで鏡を受け取って自分の顔を映す。
さあ、どんな醜い顔が出てくるのか。

「……………」

「いい顔でしょ？最高のモデルがいたのだから当然よね。せっかく整形してもらうんだからちょっと奮発したの。医師免許はないけど凄い手術技術を持つ黒尽くめのブラックなんとかって医者に頼んでソックリに整形してもらったわ。どう、かっこいいでしょ？デイルムッド　じゃなくてケイネス？」

「……………」

どこからどう見ても、ランサーの顔だった。鏡に映る、輝く貌の異名を持つイケメンそっくりに改造された己の顔面とその横で嬉々とする妻に、ケイネスは真っ白になって向き合い続けた。

後に“時計塔のイケメン講師”と呼ばれる男の、始まりの瞬間である。

1 - 5 ケイネス先生の中の人ひとりっぴいと同じ（後書き）

区切りのいいところまで書こうと思ったら更新がだいぶ遅くなりました。二作品同時進行だからキツイですが、書いてて楽しいので頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7068y/>

せっかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

2011年12月19日02時24分発行